

雪の墓標

タコ部屋に潜入した脱走兵の告白



タコ部屋に潜入した脱走兵の告白

タコ部屋脱走兵の告白

小池喜孝・賀沢昇

小池喜孝（こいけ・きこう）

1916年東京都東村山市に生まれる。
教員・出版社社員を経て、1953年北
海道北見市に移る。現在、オホーツ
ク民衆史講座会長。北海道歴教協副
会長

〔主な著書〕『鎖塚—自由民権と囚人
労働の記録』『秩父画—秩父事件と井
上伝蔵』『伝蔵と森蔵—自由民権とア
イヌ連帯の記録』（以上現代史出版会）
『常紋トンネル—北辺に斃れたタコ
労働者の碑』（朝日新聞社）

〔住所〕〒090 北見市寿町4丁目

tel. 0157—23—3036

賀沢昇（かざわ・のぼる）

1925年福島県いわき市に生まれる。
1941年9月横須賀海兵団に入団、12
月海軍少年飛行整備兵として霞ヶ浦
海軍航空隊に配属。1944年2月軍用
機爆破容疑で逮捕。5月脱走。7月
北海道・鷹泊の菅原組飯場に潜入。
1945年終戦後の8月赤平炭礦菊島組
飯場に入舎。10月アメリカ軍に救出
され、同軍の情報部（CID）に勤
務。1950年11月CIDを退職し、以後
本州の土建現場を転々とする。1959
年8月東京・昭島市役所建設課に就
職し、現在にいたる。

雪の墓標——タコ部屋に潜入した脱走兵の告白 1000円

著者 小池喜孝・賀沢昇

発行者 朝日新聞社 藤田雄三

印刷所 凸版印刷株式会社

1979年4月20日第1刷発行 発行所 東京・名古屋
大阪・北九州 朝日新聞社

© Kiko Koike & Noboru Kazawa 1979

0023-254655-0042

雪の墓標

——タコ部屋に潜入した脱走兵の告白

白 屠 潜 脱 炎 帰

金 殺 入 走 上 郷

83

59

49

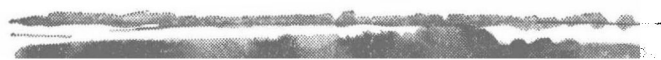
38

13

5

も
く
じ

あとがき	痛	救	敗	吹	逃	暴
	苦	出	戦	雪	走	動
263	241	203	185	152	123	107



装幀・菅原 靖
写真・沢田 彰

帰郷

賀沢昇は仙台で、常磐線まわりの上り列車にのりかえた。車内はリュックや風呂敷包を抱えた客でごった返していた。敗戦から六か月後の、一九四六（昭和二十一年）二月十一日のことである。

着ふるした国民服やモンベ姿の人びとのなかで、昇の服装はきわだっていた。アメリカの占領軍将校が着る制服にぴかぴかの靴、昇には優越感があった。

「あの人、二世のアメリカ兵よ」

というささやきが、昇の心をくすぐった。

昇は、旭川市に進駐した米軍第七七師団三〇五部隊の情報部（CID、のち「陸軍特別犯罪捜査部」と称す）に雇われていたが、いまそれを辞めて故郷へ帰ろうというのだ。

彼の故郷は、福島県の常磐線四ツ倉駅から歩いて二十分ほどの海べりで、石城郡大浦村の上仁井田（いわき）（現いわき市）であった。列車が県内にはいったところから、不安が黒雲のようにむくむくと湧きおこる

のを感じた。情報部の軍曹で二世の早川が、

「ジョー・イトウ、君が家へ帰りたい気持ちがよくわかるが、いま帰るのは早い。帰れるようになったら、私たちが送って行く。それまで、待ちなさい」

と、帰郷をとめたのを思い出した。昇は戦争中に北海道のタコ部屋で名乗っていた伊藤元治という偽名をそのまま使っていたので、アメリカ兵は彼をジョー・イトウと呼んでいた。早川軍曹は、帰心をひるがえさないでだまっている昇に、一枚の写真を見せた。それは、終戦直後、米軍が北海道・赤平^{せきへい}の住友炭礦菊島組のタコ部屋から、昇を救出したとき撮ったものである。昇は、そこに写っているぼろぼろの服にやせこけた身体の自分の姿を見て、タコ部屋のつらさとみじめさを思い起こした。

「私たちがヘルプしなければ、ユーは死刑になっていたかもしれない」

早川軍曹は、それ以上、何もいわなかったが、救助された恩を忘れ、情報部の仕事を辞めて帰るとは、なんとお前は恩知らずなのだ、と婉曲にいつていると、昇はうけとった。

死刑になるかもしれない昇を、アメリカ軍が救出したというのは、嘘ではなかった。海軍少年航空兵として霞ヶ浦航空隊に勤務中、昇はふとしたことから罪を犯し、特設禁錮室に収容され、軍法会議での死刑宣告を待つ身であったが、脱走に成功し、北海道のタコ部屋に潜伏して九死に一生を得たのであった。事実、彼の逃亡後、海軍の軍法会議は、欠席裁判で昇に死刑の判決をくだしていた。

終戦後まもなく、軍の解体とともに軍法会議は廃止され、敵前逃亡罪などは消滅したが、昇を死刑にした他の法律は、日本国憲法施行の前日、一九四七（昭和二十二）年五月二日までは、死滅せずに有効

であった。そういう日本の政治情勢をおさえていたアメリカ軍が早川軍曹に、「帰れるようになったら……」と忠告させた意味を理解しきれず、昇は書き置きを残して米軍情報部をとび出してきた。

それまで何度か帰郷を申し出ては反対され、そのたびに思いとどまってきたが、二十歳になったばかりの昇は、両親や兄弟に自分の無事な顔を見せたいという欲望を、おさえ切れなくなっていた。

制止の声を耳にいれず、列車にとび乗ってしまったことが、間違いではなかったかという不安は、仙台を出た列車が福島県に入って原ノ町駅を過ぎたところから、いっそう強まった。まさか憲兵が実家に網を張ってるはずはないにしても、警察が逮捕に来はしないか、故郷の人たちが脱走兵である自分を心から喜んで迎えてくれるか、父と母は自分になんと言葉をかけるか……などを考えると、動悸が高まった。北海道へ引き返そうかと思ったり、四ツ倉駅を素通りして東京まで行ってしまおうかと考えたりましたが、結局、父母の顔をひと目見てから旭川へ戻ろうと心を決めた。

昇は、四ツ倉から三つ手前の広野駅に下車し、海岸で時間をつぶした。次の列車で四ツ倉駅に着いたときには、すでに市街は夕闇に包まれていた。それでも用心深い昇は、街の通りをさけて、人気がない海岸の松林の中を手拭いで頬かむりをして歩いた。松林の切れ目には仁井田浦があり、そこを流れる小川沿いに一〇〇メートルほどはいった上仁井田に、昇の生家があった。

松林の木の間がくれに生家の灯が見えたとき、昇は胸にこみあげるものを感じた。小川にかかっている一本橋を渡ると、もう家は眼の前だったが、彼は警察官が張っていないかをたしかめてから、はうようにして家へ近づいた。玄関の戸のふし穴から中をのぞくと、こたつにあたっている母の背中が



昇の生家

やせて見えた。心配かけすぎたせいか、白髪もふえていた。

昇は九人兄弟の上から四番目だった。父と、ギルバート島（赤道直下の日付変更線近くのイギリス領の島）で負傷した長兄等の姿は見えなかった。次兄光義と三兄高義の元気な顔は見えたが、昇のすぐ下の弟で満州へ行った五郎と、その下の弟弘行はおらなかった。つづくつや子と進と京子の三人の妹弟は、こたつの囲りですごく遊びをやっていた。旧正月が終わったばかりだった。

母の声がしたが、何をしゃべったのか、昇には聞きとれなかった。

「今になっても出てこないんだから、どっかで死んでるかしんねえ。自殺したかしんねえな」

と、次兄がいうのを耳にした昇は、思わず、

「光ちゃん、光ちゃん」と、次兄の名を呼んでしまってから、はっと気がついて、急いで庭のはずれの

木かげに身を隠した。

次兄の光義が玄関の戸をあけて出てくるなり、

「和彦くんか」

と、近くの友だちの名を呼ぶのを聞いて、昇は思わず關の中から兄の前に出て行って、

「おれだよ、光ちゃん、おれだよ、わかるか」

といった。兄は昇の顔をじーっと見てから、

「あつ、昇じゃないか」

というなり、

「昇が、昇が、帰ってきたよーっ」

と、家の中に向かって叫んだ。裸足でとび出してきた母や兄弟たちに引っぱられるようにして、昇は家のしきいをまたいだ。

こっぴどく叱られるだろうと思っていた父の源之助は、三か月前に他界していた。真新しい父の位牌が、仏壇にあった。

「われのこと、いちばん心配していた父ちゃんに、真っ先に挨拶しな」

と兄にうながされて、昇は仏壇の前に坐った。あんなに逢いたかった父、心配のかけっ放しだった父に、申しわけない気持ちでいっぱいだったが、涙は出なかった。兄がそれを見咎めていった。

「昇、われ、父ちゃんの前で、なんて詫びた？ 父ちゃんは、われのことを心配して、寿命をちぢめ

たんだぞ。それなのに、われ、父ちゃんの前で、涙が出ないのかよ。親が死んだとき、子供が泣くのは当たり前だ。とりわけわれの場合、そうじゃないのか。それなのにわれは、けろっとして、涙を流さない。われは、鬼のような子供だぞ。われは、鬼っ子だっ」

兄光義は、泣きながら昇を叱った。

父の死を知り、位牌の前にぬかずいても、なぜ涙が出なかったのか、昇は自分でも不思議でならなかった。そのわけがわかるのは、だいぶあとになってからである。

昇の帰郷は、その日のうちに大浦村じゅうに知れわたり、翌日の村は昇の噂で持ち切りになった。

「仁井田の源さんとこの昇が、生きて帰ってきたそうだな」

「よくもまあ、逃げ切れたもんだな」

「うんだ、支那さ行つてたつていう話だぞ」

「いいや、アメリカの捕虜になってたんで、進駐軍の軍服着て帰ってきたそうだ」

「やつは潜水艦に乗って、アメリカへ行つてたそうだぞ。うんだから、進駐軍の服着てんだっべえ」

昇は村民の好きな眼の対象となり、噂は尾びれをつけて走りまわった。

仁井田の小字南浜には、賀沢姓を名乗る家が、昇の生家も含めて二十数軒あった。その本家にあたる賀沢喜一夫婦は、昇が帰ってきたその夜のうちにかけつけた。本家は昇にこういった。

「昇、父ちゃんは去年の十一月に脳溢血で死んだ。われが、あんなことをしたのを氣に病んでな。われが霞ヶ浦を逃亡してからというものは、四ツ倉警察署の笠原という特高と水戸の憲兵が家を張って

な。父ちゃんが出かけるたんびについてくるんで、父ちゃんは怒っちゃってな、

『昇が帰ってきたら、警察さ必ず連れてくから、おれのあとをつけたりしねえでくれ』
ってな。そしたら特高がいったそうさ。

『おめえの息子は、とんでもねえ不忠者だが、自首して出れば死一等を減じてやる。けれど、日本の警察や憲兵の眼をのがれて、逃げのびられるはずはねえから、どっかで自殺してるかもしれないねえ』

って。それで父ちゃんは寝こんでしまった。それでも新聞の変死記事を丹念に読んで、どっかで死体が発見されたりすると、聞きに行ったりしてな、われのことえらく心配していたぞ」

喜一おじが、昇の手をとって、涙を流してこう訴えたのが、昇にはこたえた。

父の死が、昇の逃亡事件と無関係でないことは、ほかにも親しい人から聞かされた。昇は自分の逃亡が、一家に大きな不幸をもたらしていたのを知った。長兄も戦傷がまだ治らず、生家の近くの家で療養をしていた。

賀沢喜一は昇に会ったあと、近くの村長宅に急行した。

「賀沢昇が帰宅したら、警察と憲兵隊に急報し、自首させよ」

という軍の命令は、終戦後も終戦連絡事務局に引きつがれていたからだ。

村長のところへ、「逮捕無用」の連絡があったのは次の日の夕方だった。喜一は昇の家へとんでき、て、「よかった、よかった」を連発した。母は翌日村役場へ行って、昇の移動証明書をもらってきた。母は道で会う人ごとに、

「おかげさまで、死んだと思つた息子が、ひょっこりけえってきてな」

といった。

しかし役所や警察が「無罪」の措置をとつても、昇を見る村民の眼には依然としてけわしいものがあつた。それを知つた昇は、外出するにも夜をえらんだ。故郷には、人の眼に茨が茂っていて、すでに安住の地ではなかつた。昇の帰郷は、わずか四日間で終わった。

炎 上

賀沢昇は一九二五（大正十四）年十月二十四日、九人兄弟の四番目に生まれた。父源之助は、一九三三（昭和八）年に常磐炭礦でハッパにやられ、左腕をおとし、そのときもらった手当てで建てた家が現在もある昇の実家だった。三反歩（三〇アール）の田んぼと一反歩の畑とを妻にやらせ、自分は義手で馬車追いや出稼ぎをやったが、九人の子供を育てるのは苦労だった。

昇が小学校に入学した一九三二（昭和七）年ころは、農村恐慌の真っ最中であつた。一九三一（昭和六）年に地元の磐城銀行が倒産し、金融恐慌の波をまともにかぶつたこの地方では、一九三三（昭和八）年には県下学童の一五パーセントが欠食児童の扱いをうけるほどだった。

一九三四（昭和九）年、昇は三年生になった。この年は五月になつても阿武隈山中に降雪があり、大凶作に見舞われた。片手を失なつた源之助が、九人の子供を抱えて恐慌の嵐を切り抜けることは無理であつた。妻よしえは、救済事業の仁井田川河川改修工事に出た。その金が入ると主食の麦を買って、

一家十一人の露命をつないだ。よしえはその後、久之浜炭礦の後山あとやま（切羽で石炭を掘る人を助け、石炭を運搬する人）に入った。よしえは、産月うみづきになっても休まず仕事に出かける頑健な母親であった。

一〇燭光（一二・五ワット）一つの電氣料を滞納して電氣をとめられたことがあった。器用な源之助が、本線から盗電してしのいでいたのが見つかり、滞納金以外に罰金を出せと責められたときは、よしえが炭礦から持ち帰ったカーバイドで、灯りをとった。

大浦村は、賀沢家のある海岸の南浜と、阿武隈山脈寄りの水田地帯とに分かれていた。耕地の少ない南浜では、磐城セメントや常磐の炭礦や漁師町に出稼ぎに行く人が多かった。近くに山がない南浜では、防潮林に薪拾いに行ったが、看視人に見つかり籠ごと取り上げられることも、たびたびであった。そのため昇は兄といっしょにリヤカーで、阿武隈山麓の林に、薪拾いに行くこともあった。

小学校時代の昇がいちばんきらいな課目は習字だった。字が下手だとか、書くのが嫌いなわけではなく、紙代が出せないため、習字の時間がつらかったのである。習字のある日は、仁井田浦で、兄貴といっしょにナマスやウナギをひやし針で取り、その魚を料亭に売って、紙代にしたこともあった。

教科書は中古を貸してもらい、ノートは役場から支給された。地理の教科書を読まされたとき、昇の本には「アビシニア」とあるが、新しい本では「エチオピア」となっていたため、友だちからアビシニアという渾名あだなをつけられたりもした。

五年生のとき、昇は兎を飼った。学校から帰るなり、五十匹ほどの兎の餌の草とりに出かけた。おそく帰ったときなど、大きな籠を背負って、泣きながら草刈りに行くのを、父が手伝ってくれること